非専門家のアートの共創に関する心理学的研究 -美術館ボランティアと地域芸術祭ボランティアの比較-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学人文科学研究所 公開日: 2023-05-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 美加 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/00023045

明治大学人文科学研究所紀要　第90冊　（2023年３月31日）361-383

非専門家のアートの共創に関する心理学的研究：美術館ボランティアと地域芸術祭ボランティアの比較

佐々木　美　加

A Psychological Study on Co-creation of Art by Non-professionals: Comparing the Volunteers of an Art Museum and an Art Festival

SASAKI Mika

The purpose of this study is to clarify the co-creative communication in art related volunteers. Interviews were conducted with the volunteers of Setagaya Museum and Echigo-Tsumari Art Festival in order to investigate their communication. All resulting data were analyzed using KJ Method. We compared to assess any similarities and differences between the volunteers of Setagaya Museum and Echigo-Tsumari Art Festival. The similarities were "attachment for art activities", "flat relationships". The Setagaya Museum volunteers felt attachment for the art education, on the other hand, the volunteers of Echigo-Tsumari Art Festival (Kohebi-tai) felt attachment for the art works in the festival. Regarding flat relationships, the activity around art were co-creative, so that the communication had no conflict of interest. The differences were found in life style in their living place. The peculiarity of Kohebi-tai were dynamic interactions between those living Echigo-Tsumari and other places. These tendencies will facilitate the immigration from other places. The peculiarity of Setagaya Museum volunteers facilitated the interactions between generations. Particularly Setagaya Museum volunteers showed the activity in the museum made routine of everyday life of senior citizens. The tendency will prevent senior citizens from social isolation.

《特別研究第１種》

非専門家のアートの共創に関する心理学的研究：美術館ボランティアと地域芸術祭ボランティアの比較

佐々木　美　加

１．本論文の構成

本研究では，非専門家のアートに関わる共創的コミュニケーションがボランティア活動において生じていることをインタビュー調査により心理学的に明らかにする。インタビュー調査の分析は第４章で詳述するが，その前に，第２章・第３章では，これまでのアートに関連する心理学的研究を概観する。

第２章では，アートと心理学的体験の共有や共体験について，知覚心理学を中心にレビューを行う。次に，アートが臨床心理学において診断やカウンセリングに用いられてきた経緯，および心理学からアートセラピーに至る経緯を簡単にまとめた。こうしたアートセラピーのようなこころの病を癒すという観点は，アートの側からのアプローチも進んでいく。その代表的なものとしてヒーリング・アートやホスピタルアートの社会への浸透について紹介する。

第３章では，アートの包摂性と心理学との関係について整理した。福祉施設での芸術活動の発展の実際や，特別支援教育において美術ワークショップが行われている実例が紹介された。福祉施設や特別支援教育において近年割合が増えつつある発達障害児の教育においても，美術制作のワークショップが用いられ，コミュニケーション能力のトレーニングや社会性の発達への有用性が論じられた。また，アートを介して病院と地域住民の交流が促進されたり，障害者イメージがポジティブになったり距離が縮まることも紹介された。

その上で，第４章において，アートに関するコミュニケーションの視点に絞ってそれぞれの特徴を分類し，特に福祉や特別支援教育などの支援的コミュニティとアートの共同作業を介する共創的コミュニティに分類した。第３章で紹介されたアートを介したコミュニケーションは支援的コミュニティであり，第４章～第６章では，これまで心理学的研究があまり行われていない共創的アートについて心理学的研究が行われた。具体的には，アートに関わるボランティアのコミュニティのインタビュー調査が進められた。

本研究は，アートの専門家でもなく，障害者教育でアート活動を行っているわけでもなく，いわゆる普通の市井の人々がアートに関わるボランティアの方の活動にどのような心持で臨んでいるのか，ボランティアによってどのようなコミュニケーションの変化があったのか，何が彼らをアート関連ボ

ランティアにひきつけるのか，それを明らかにするためにインタビューを行った。インタビューは，東京都心の世田谷区にある世田谷美術館のボランティアの皆様と，新潟県十日町市の大地の芸術祭に携わったボランティアの皆様にご協力頂いた。

第4章～第6章のアンケート及びインタビューデータについては内容分析を行い，図解にまとめられた。図解を解釈することで，都心の美術館のボランティアと地方の芸術祭のボランティアにおいて，アートに関わるボランティアの心理として同じ部分と異なる部分が浮き彫りになった。このことから，ボランティアの方にそれぞれの特徴に合うボランティア活動の場を提唱することが出来，ボランティアの個人的適応にも結びつき，ボランティアの組織の運営にも有用ではないかと考えられた。

本論文は，こうした本章に述べた構成で論じられ，以下第2章でアート作品と心理学の関係，第3章でアートの包摂性と障害の関係を概観し，第4章～第7章において非専門家のアートに関する共創を心理学的に明らかにするものである。

2．アート作品と心理学

2.1　アートと知覚心理学

アートの心理学的影響というと，古くから研究されているのはやはり知覚心理学の領域であろう。なかでも錯視はアートと関連が深い。錯視を取り入れたトリックアートはその最たるものだろう。たとえば展覧会図録『サマーミュージアム　だまし絵　かくし絵　ふしぎな絵』(北海道立近代美術館，1983）の中では，そもそも絵画の遠近図法が，二次元の世界を三次元の世界のように見せかけていること自体がだまし絵だと述べている。また同書は，エッシャーが作成した二次元と三次元が交錯した不思議な絵や，円筒の鏡を使わないと正しく知覚できないひずみ絵（アナモルフォーシス）など多くのだまし絵やひずみ絵が紹介され，知覚心理学のメカニズムも解説されている。

筆者自身も，心理学の授業で錯視を教える際には，これらのだまし絵やひずみ絵というアートを用いて解説を行う。こうした錯視の体験にアート作品を用いることで，学生たちは個人的に，描かれた作品とそれに対する知覚の不思議を体験することが出来，必ずと言っていいほど学生同士での驚嘆や発見の共有の中でコミュニケーションを楽しむ姿が見られる。つまり錯視図形自体は，図形を知覚することによって反応しその反応を面白いと思うことなのだが，アートがコミュニケーションを生じる影響も及ぼすところが社会心理学者としては興味深い点である。

2.2　アート作品と鑑賞者のインタラクション

こうしたアートを介したコミュニケーションは，現代も発展を遂げている。額に入った絵画作品などではあまり見られないが，デジタルアートにおいて，感応式の仕掛けを使って制作が盛んに行われている。たとえば，デジタルアートでは鑑賞者が受動的に作品を鑑賞するだけではなく，鑑賞者が能動的に作品に接触することによって作品が変化するものもあるからだ。これはつまり鑑賞者がインタラクティブに作品に関与することで成立する作品であり，インタラクティブアートと呼ばれている。

こうしたインタラクティブアートもさることながら，今も「錯視」「だまし絵」「トリックアート」を理解し体験するために，デジタルコンテンツをデザインして教育に活かそうという動きもある（森長，2018）。こうした「錯視」「だまし絵」「トリックアート」などの教育は，美術教育の分野で進んでいると考えられるが，錯視の理論化は心理学分野で進められている（北岡，2010）。

つまりアートと知覚の心理学は学問的にも表裏一体あるいはインタラクティブに織りなしているような関係であると言える。知覚心理学がアート作品の構造やそれに対する/それによる，反応の側面でインタラクションを生じているともいえる。一方で，アートに関わる“人と人とのコミュニケーションという分野は，心理学的にはあまり研究が進んでいないと思われる。これまでコミュニケーションの分野でアートと心理学が関わってきたのは，こころの病の治療においてアートが多く援用されてきたことだろう。次節ではアートと臨床心理学について概観する。

2.3　アートと臨床心理学

臨床心理学においては，性格の把握や精神疾患の診断に模様や絵のある図版が多く用いられてきた。精神疾患の臨床場面でアートが用いられるようになったのは，歴史的にはフロイトが無意識の心理学を発展させたからと考えられている。すなわち，意識化されず言語化されない無意識の状態が投影されるのは非言語的世界である絵の中だと考えられたのだ。

そこではまず絵（描画）に対する反応を測るという方法が用いられた。これらは投影法といい，図版や絵で示された刺激に対する反応を診て分類・判断することにより，こころの状態や性格を把握する方法である。たとえば，インクの染みで作られた10枚の図版が何に見えるかという反応から性格を把握するロールシャッハ・テストが挙げられる。また，主題のあいまいな絵を呈示して，クライアントに自由に物語を作らせ，その物語を分析することによる性格を把握するTATなどが挙げられる。

絵を描く課題で描画によって性格を把握する描画検査としては，実のなる木を描くバウムテストや性別の違う人の絵を1枚ずつ別の紙に描くDAP（Draw A Person）などが挙げられる。また，関係性についての無意識のこころの状態を把握するため，クライアントに自身を含めて家族を描くDAF（Draw A Family）などの家族関係を把握する心理検査などが開発されてきた。これらはとりもなおさず，描画というアート作品制作と同じ作業を通してこころの状態を把握し，カウンセリングに利用してきたことに他ならない。

一方で，アートを実践する中でセラピーとして芸術の制作を心理療法として用いるアートセラピーも発達していった。これは先に紹介したTATやバウムテスト，DAP，DAFなどのように，クライアントが描いたものからこころの状態を分析するという目的ではなく，クライアントに描画や造形制作という作業をしてもらうことによるこころの状態を改善することを目的としている。

特にアートセラピーは，心理学の立場からは，心理検査や心理療法という目的をもって発達してきた。一方でアートの側からのアートセラピーは，芸術制作が目的で発達してきた。そもそもアート作品では心理的な不安定や不適応の状態で制作されたものも，作品自体の評価とは別物である。制作という行為自体の創造性や楽しさや集中力などがセラピーとして作用するといういわば副作用を利用し

たことから発展してきたといえるだろう。このように，アート制作と臨床心理学は相互に影響しながら現在に至っている。

2.4　アートコミュニケーションとヒーリング

アートコミュニケーションは，アートセラピーの潮流を受け継いだ方向で，ホスピタルアートにも発展している。芸術の表現する人のこころという観点だけでなく，見る人感じる人を癒すためという観点も取り入れられている。李（2014）は，学生ボランティアを率いて，小児病棟でのアート関連のイベントとして，子供だけのイベントや入院児童の親とのイベントなどを開催した。そこでは，ホスピタルアートを含むボランティア活動が，入院生活で苦痛に耐えるだけでなく，日々の生きがいを創造し，辛い時間を貴重な未来に活かすプラットフォームになりうると指摘されている（李，2014）。

また，山野（2014）は，1992年から病院や介護老人施設などの医療・福祉施設にアートを設置する活動を行い，ヒーリングアート（癒しの芸術）を推進している。山野（2014）は，ヒーリング・アートプロジェクトにより美大生が大学で学ぶ専門性を活かしながらボランティア活動を行うプロジェクトを実施した。山野（2014）は，美大生が制作しながら社会と連携して社会問題の解決と社会貢献につなげることを目的に制作指導を行った。

このヒーリング・アートプロジェクトは，入院患者を癒すと共に美大におけるサービス・ラーニングの機能を果たすものであった。同様のプロジェクトとして，障害者と市民の交流および地域活性を目的としたワークショップを小平市社会福祉協議会ボランティアセンターと連携し，武蔵野美術大学の学生が企画・実行するケースも紹介されている（齋藤，2016）。

地域とのコミュニケーションという点では，イギリスのチェルシー・ウエストミンスター病院のホスピタルアートが効果を上げている。この病院では，現代アートを取り入れた設計になっており，地域の人々が気楽に立ち寄れる空間で，病院を地域から孤立させないつくりになっているという（林・湖山，2006）。そのおかげで近所のビジネスマンや主婦がコンサートを聴きに来たりランチを食べにくる場所になっている。これはホスピタルアートが病院を地域に開かれた場所にした例といえるだろう。

3．アートの包摂性と障害

3.1　アール・ブリュット

アール・ブリュットとは，フランスの画家ジャン・デュビュッフェが1945年ごろから精神病院で患者が書いた作品を称し「生の芸術」「加工されていない芸術」と呼んだことを起源とするとされている（川井田，2013）。アール・ブリュットは，画廊やサロン中心の評価とは一線を画し，アウトサイダーアートという分野を確立した。日本では，一般的に障害者アートと認識されており，福祉施設などで障害者アートを支援する活動が注目されている。

2004年障害者自立支援法の制定後は，well-beingの一環として福祉施設での芸術活動が位置づけられるようになった。日本でアール・ブリュットの先駆けともいえる「たんぽぽの家」の創始者の播磨

靖夫氏が提唱したエイブル・アートの活動は，年々活発に発展を遂げているように見える。筆者も見学に行ったが，現在はアートセンターHANAというアトリエが完備された施設がある。アートセンターHANAでは，アート活動をサポートする介護者やボランティアが常駐しており，入所している障害者が自由に創作活動が出来る環境が整っている。更に京都市立芸術大学の大学院生との作品のやり取りという試みも行われていた。また，たんぽぽの家では，一般客を対象に，入所者が制作した作品を販売している。また3Dプリンターも導入し，入所者が張り子を作り，絵付けをする体制も整えられていた。このようにアートは，障害者の精神的安定や経済的自立にも貢献する役割を果たしうることがうかがえる。

3.2　特別支援教育とアート

障害者は，たんぽぽの家のような施設に入所している人ばかりではなく，自宅から学校に通学しているケースも多い。その場合，障害の程度にもよるが，普通学校やクラスには通学できないが，施設に入らず勉強を学習することができるのであれば，特別支援教育を受けることになる。

特別支援学校や特別支援学級でのアートの教育について，池亀（2018）は特別支援学校教職員にアンケートを行って検討している。その結果，活用したい美術教育については，絵画と造形が60％以上で上位を占め，美術のワークショップも48％を占めていた。特別支援学校におけるアートやアート・ワークショップの教育が少なからず求められていることが窺える。

田中（2018）は，高校の通常学級における美術教育における造形課題において，発達障害児への配慮について述べている。その中で「わりばしワークショップ」を紹介している。このワークショップは，わりばしを表現の素材とし，グループで作品制作する。制作を進める際，最初に一人でわりばしに向き合って彫る作業を経てグループでの作品制作に移る。こうした過程で，集中しやすいことや得意なことが様々あることを知り，それぞれの個性や能力の違いを理解するきっかけになると指摘されている。

葉山（2018）は，特別支援学級での美術教育の経験から，教育にアートの必要性を主張している。すなわちアート・ワークショップでは自分が当事者として体を動かす作業があり，これが自己の存在に中心を作ることになる。更に自己と他者に距離感が生まれ，自立と他者理解に向かうという。

また，美術は，具体的に手にすることができないこころのありようを色と形に置き換えて表すという特徴があることが指摘され，アートもコミュニケーションも置き換えを本質としているので，アートは社会性を育むコミュニケーションだと葉山（2018）は論じている。更にグループ作業で出来た作品が，協力することの意味を実感させ，社会性の基礎を培い，コミュニケーション能力を高めるだろうと述べている。

一方，杉山（2011）は，浦安市の子供発達センターでの芸術療法コースにおいて実施してきた造形ワークショップ「だれでもワークショップ」で経験した発達障害児への対応の試行錯誤について記述している。ファシリテーターの学生たちがリズムでムードを作り，子供たちが最終的には作品に自己投影できたことを報告している。

3.3　アートを介した障害者との交流

先に紹介したホスピタルアートでは，美術大学の学生が制作した壁画や装飾作品，あるいはワークショップなどで入院患者やその家族が心を癒した例があった。また，専門の建築家が建造したチェルシー・ウエストミンスター病院のデザインが，地域住民との交流を産んでいることが紹介された。

鈴木（2014）は，芸術コース設置を設置した特別支援学校での教育実践とインクルーシブ・アートの意義について考察している。その意義として，芸術コースで制作された作品を商品化し，販売することによって地域住民との交流を図っていることが挙げられている。また，市民ギャラリーにおいて展覧会を行い，これがインクルージョンへの意識の高揚となり，アウトサイダーアート（あるいはアール・ブリュット）を生んだと考えられている。

一方で，特別支援学校のアート作品の美術展については，池川・美坂（2017）が，盲学校の視覚障害者の作品を県内の普通高校と同じ規定で出品されることに疑問を呈している。それは障害者差別解消法に則って障害者への理解を深めて展覧会も行う必要があるとの指摘もある。

佐々木（2021）は，アートプロジェクトにおいて，(1) 作業活動を行い (2) 物理的表象として自由に表現することは，障害の有無でハンディキャップが生じることもなく相互の個性を理解できるものと主張した。また，アート・ワークショップで体験できる (3) 創造性と自他意識，(4) 共創と社会性は，障害の有無にかかわらず青年期において獲得すべき個性と自己概念，そして社会性であり，障害者との交流において有効ではないかと述べている。

生川の調査（1995）では，障害者（この場合精神遅滞者）との接触経験のある人の方が無い人に比べて障害者（精神遅滞者）と関わろうとする気持ちや，地域交流を推進しようという気持ちも強いことが示され，女性の方が男性よりも精神遅滞児に対して好意的態度であることも示された。

佐々木（2022）は，障害者教育，福祉，あるいはノーマライゼーションについて特に専門的学習を行っていないナイーブな学生に対して，特別講義で障害者教育について学習を促し，講義中にプロの障害者ダンサーが登壇してダンスのワークショップを実施する授業を行った。その結果，講義受講前後で「障害者との交流での当惑する」という感覚が減じられていた。また，多様性認識が高いほど障害者へのイメージはポジティブになり，障害者の接触がある方が障害者へのイメージはポジティブに変化していた。また「交流の場の当惑」が受講によって減少した幅が大きいほど，障害者へのイメージはポジティブになり，障害者との距離が縮まったと強く感じられていた。

すなわちアートを介した障害者や入院患者との交流が偏見を弱め，病院との日常の行き来が増えるなどの交流も増えることが示された。しかし，これはプロのダンサーのアート・ワークショップであり，プロの建築家のデザインによる交流の誘導であった。あるいは，美術コースの学生の作品であったり，アール・ブリュットと認定されるような作品，あるいはアトリエや芸術大学の学生の指導や製品化のシステム化などが整っている場合で，いわばプロの手が入ったアートの交流であった。

次節では，ある種全くアートの専門家の手が入らない形でのアートを介した交流が，人々のコミュニケーションに与える影響を概観する。

4．美術館ボランティアのアートコミュニケーション

4.1　美術館ボランティアとは

本研究は，美術館ボランティアのコミュニティの心理過程を研究するが，まず美術館ボランティアの基本的な在り方を整理する。

美術館等のボランティアは館が最も緊密に連携を取るべき「協働者」であり，生涯学習社会における「学習者」だとされる（岡庭，2012）。生涯学習としての美術館ボランティアは社会的対価や精神的対価を得ることができ，ボランティア研修室は地域の生涯学習センターとも言われる（栗田，2013）。西岡・君塚（2019）は，世田谷美術館の小学生を対象とした対話型の美術教育を担うボランティア・スタッフである鑑賞リーダーの聞き取り調査を行い，鑑賞リーダーが美術教育に重要なファシリテーションをもたらすと分析している。

これに対して佐々木（2020）は，アート関連コミュニティの種類を美術館という施設によって分類するのではなく，アートの機能・影響によって分類している（図1）。

アート関連コミュニティの種類

・アートに関するボランティアを2つの視点で区分 　・アート・セラピー 　・学校，コミュニティ・センター，病院アート	アート＝サポート道具 支援的コミュニティ
・ユニバーサルアート 　・障害者のアクティビティや就労支援 ・アート・プロジェクト 　・芸術祭運営・実施に参加 ・美術館の美術教育普及活動 　・教育参加	アート＝共同作業 共創的コミュニティ

図1　アート関連コミュニティの分類

すなわち，上段のコミュニティは，アートセラピーや臨床医療，学校における精神支援，およびユニバーサルアートなど障害者のアクティブティや就労支援を含むものである。これは，アートが対象者のサポートになるもので，アートが道具的役割を担う支援的コミュニティのことである。

それに対し，下段の方のアート関連コミュニティは，アートプロジェクトや美術館の鑑賞教育棟の美術教育普及活動等である。こちらは，就労支援や教育参加を行い，アートは共同作業として位置づけられる。従って，芸術祭のボランティアや美術館のボランティアは，共創的コミュニティと考えられる。

こうした共創的アートのコミュニケーションによってどのように共創的コミュニティが形成されていくのかを調べるのが本研究の目的である。そのため，代表的な共創的コミュニティとして，美術館のボランティアと地域芸術祭のボランティアを研究対象とした。

4.2　世田谷美術館のボランティア

本研究では，世田谷美術館のボランティアを調査対象とするが，世田谷美術館のボランティアの主な活動は鑑賞リーダーと100円ワークショップである。鑑賞リーダーとは，世田谷区内小学生に対する鑑賞教育の一つである。グループになった児童に対し，鑑賞リーダーが展示されている作品について一緒に鑑賞する，または鑑賞をリードする役割を担っている。鑑賞リーダーは，一か所に集まり学芸員から予め展示作品の解説を受け，作品についての知識を持っている。だが，世田谷美術館では，作品の知識をただ教えるのではなくVTS（Visual Thinking Strategies）を積極的に用いている場合が多い。

VTSとは，「対話型鑑賞」と訳される美術鑑賞の方法で，当初は子どもの思考能力や対話能力の向上を目的に実践されているものだ。方法としては，作品についての予備知識を持たずに鑑賞者は参集し，自由に感じたことや気づいたことを発言するというものである。自由な発言の交換が一通り終わった時点で，鑑賞リーダーが作品の説明をするというのが対話型鑑賞の基本パターンである。しかし，対話型鑑賞は自由な発言が重んじられているため，必ずしもパターンに忠実に行うわけではない。

対話型鑑賞は活発な意見交換が行われることが多いためか，様々な場面に応用されている。現在は日本語教育に用いられて効果を上げたり（桐澤，2020），対話力の育成に用いられることもある（若生・清水，2017）。

世田谷美術館の鑑賞リーダーのもう一つの活動は，100円ワークショップである。このワークショップは，土曜日の午後に行われ，100円でその時に行われている美術展に関連するワークショップキットを美術館の工作室で製作するというものである。世田谷美術館の100円ワークショップは，1986年から開始されコロナ禍でも，ワークショップキットを販売し，「お家でワークショップ」と感染対策をしながら続けられていた。従って，100円ワークショップは36年間継続していることになる。

鑑賞リーダーは，100円ワークショップの参加者が，購入する際に対応し，ワークショップのキットを組み立てたり着色したりするのをサポートする役割である。鑑賞リーダーは高齢者が多く，また普段から鑑賞教育で小学生に接していることもあり，ワークショップでもよく子どもに声掛けをして一緒にワークショップを行っている。こうしたアート・ワークショップや作品鑑賞というアート活動を介してどのようなコミュニケーションが生じ，どのようなコミュニティが発達しているのかを調査する。

これまで美術館ボランティアは美術教育普及の視点から研究され，スタッフの生涯学習等，コミュニケーションの視点からの研究は不足している。本研究では，ボランティア・スタッフの生涯発達の側面だけでなく，美術館ボランティアが心理過程にどのように影響し，コミュニティ形成に至るのかを心理学的に研究する。研究では20年以上発展を遂げている世田谷美術館の鑑賞リーダーのメンバーへのインタビューを行うが，その予備調査として世田谷美術館が行った鑑賞リーダーに対するアンケートを分析する。この分析を通じて，鑑賞リーダーが形成する地域のコミュニティに至る心理過程を把握する上で重要な基本的概念を抽出するのが目的である。

4.3　予備調査

4.3.1　方法

2008年に世田谷美術館ボランティア・鑑賞リーダー10周年記念誌に掲載されたアンケートで世田谷美術館が鑑賞リーダーに対して実施したものを許可を得て再分析した。2008年度当時の鑑賞リーダーの登録者は402名（男性77名，女性325名）で，活動者は217名であった。登録者の職業内訳は，専業主婦91名，就労者67名，退職者43名，学生39名，アルバイト8名，なし6名不明146名である。本研究で分析対象としたのは，これらの鑑賞リーダーとしての活動者のうち同誌に掲載された44名のアンケート回答である。回答者の年齢・性別は不明であったが，各回答者はイニシャルで弁別されていた。

4.3.2　手続き

本調査は，世田谷美術館学芸部普及課の東谷千恵子学芸員のご協力により世田谷美術館の許可を得て2次的分析を行った。アンケートは，次の5つの質問で構成されていた。

〈1〉鑑賞リーダーを始めた時期

〈2〉鑑賞リーダーに参加した理由

〈3〉あなたにとって「美術館」とは？

〈4〉鑑賞リーダーを一言で言うと？

〈5〉鑑賞リーダーについて思うこと，印象に残っていること

上記の5つの質問のうち，〈1〉については，単純集計を行い，〈2〉～〈5〉の質問についてKJ法による内容分析を行った。

4.3.3　結果

まず「〈1〉鑑賞リーダーを始めた時期」について，人数集計を図2にまとめた。1997年～2000年の開始者17名，2001年～2004年の開始者12名，2005年～2008年の開始者が15名であった。

次に，「〈2〉鑑賞リーダーに参加した理由」については，世田谷美術館の生涯学習事業や世田谷美術館への愛着，または美術への愛着や子供への愛着，あるいはその両方が，教育普及意欲や地域貢献意

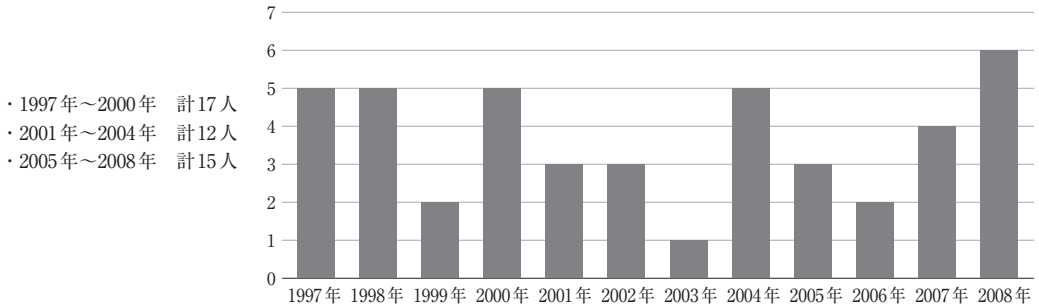

図2　鑑賞リーダーの開始時期ごとの人数

欲に結びついていることが窺えた。それとは独立に単純に興味があったという理由もみられた。

この結果から，世田谷美術館の事業や世田谷美術館への愛着から教育普及の意欲が強められ，美術への愛着や子供への愛着から地域貢献意欲が強められると予想された。

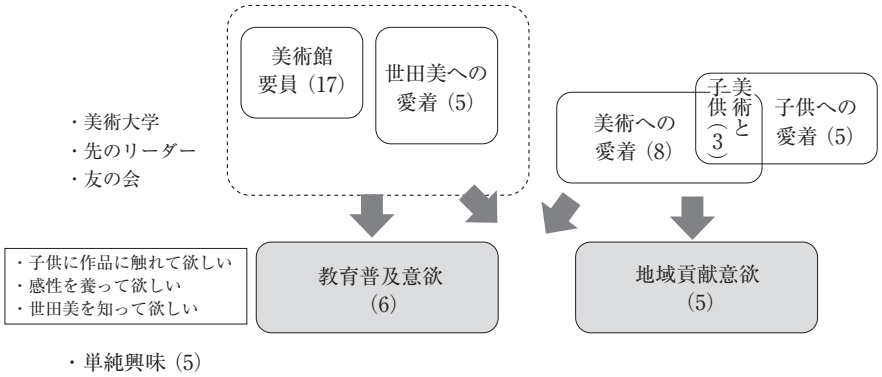

図３　鑑賞リーダーに参加した理由

- 理由
  - ・(1) 単純興味
  - ・(2) 美術館および美術館事業への愛着
  - ・(3) 美術への愛着
  - ・(4) 子供への愛着
  - ・(3) および (4)
- 目的
  - ・教育普及意欲← (2) (3)
  - ・地域貢献意欲← (3) (4)

美術館および鑑賞リーダーについてのイメージは，

- 美術館の位置づけは，(1) ～ (5) にまとめられた。
  - ・(1) 癒し，非日常
  - ・(2) 新しい発見や創造の場
  - ・(3) 人との出会い……交流
  - ・(4) 作品との出会い，ふれあい
  - ・(5) 人生・生きがい・楽しみ
- 目的は，達成感，寄り添う人，導く人で，それぞれ(1)が達成感，や寄り添う人のイメージを形成し，(1) ～ (5) は導く人のイメージに関連すると考えられた（図４参照）。
  - ・達成感 ← (1)
  - ・寄り添う人 ← (1)
  - ・導く人← (1) (2) (3) (4) (5)

3 あなたにとって「美術館」とは？
4 鑑賞リーダーを一言で言うと？

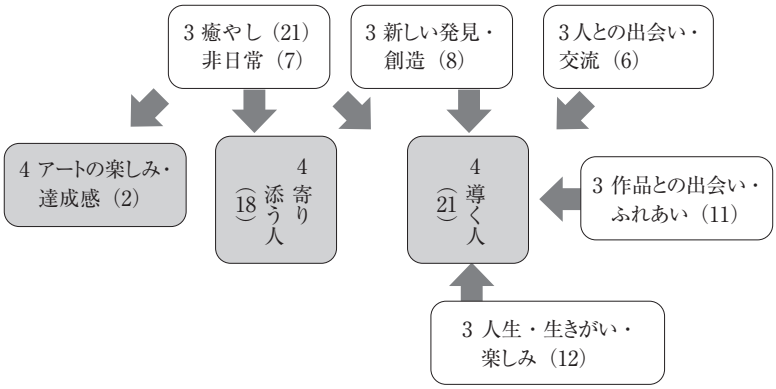

図４　あなたにとっての美術館・鑑賞リーダー

最後に，鑑賞リーダーの活動については，活動体験（鑑賞教室参加生徒の完成や行動の観察・体験）から，活動による反応・思考（1～3）に影響し，次に社会的つながり（子どもとの交流，仲間との交流）につながると考えられた（図５参照）。

- 活動体験
  - ・鑑賞教室参加生徒の感性や行動の観察・体験
- 活動による反応・思考
  - ・(1) 鑑賞教室参加生徒からの刺激
  - ・(2) 鑑賞教室参加生徒への願い・教えたいこと
  - ・(3) 鑑賞教室参加生徒への批判等
- 社会的つながり
  - ・(1) 子供との交流
  - ・(2) 仲間との交流

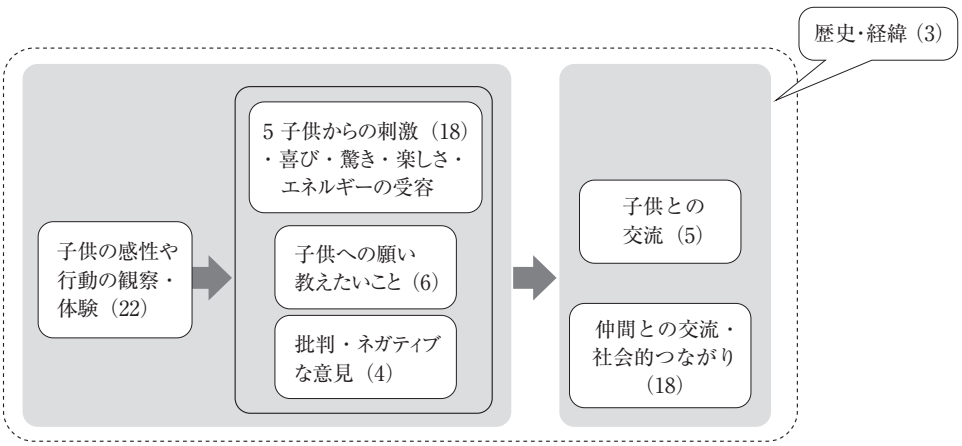

図５　鑑賞リーダーの活動とは

4.3.4　考察

ボランティア活動を支えているのは，美術館やアートへの愛着と子供への愛情・教育であることが窺えた。また，鑑賞リーダーの在り様というものは「寄り添う人」「導く人」というイメージであった。

活動体験からは参加生徒への願いや批判，それと共に刺激を受けていることが明らかになった。そこでは，参加生徒との交流，活動を共にする仲間との交流が見られ，それがコミュニティの形成につながっていると考えられた。

しかし，アンケートの回答は限られているため，この結果をもとにインタビューの質問項目を作成し，さらに詳細なインタビュー調査を行う必要があると考えられた。

5．世田谷美術館ボランティアへのインタビュー調査

5.1　目的

佐々木（2020b）は，要支援者が介在しない参画型共創的アートの活動としてアートプロジェクトの大地の芸術祭ボランティアを取り上げ，インタビューにより心理過程を分析した。美術館ボランティアの活動も，要支援者へのサポートではなく美術教育というアート活動参加という点で共通している。そこで本研究では，地域芸術祭ボランティアのインタビュー調査（佐々木，2020b）と同様の方法でインタビューの内容分析を行い，美術館ボランティアの共創的アート・コミュニティの形成を明らかにする。

5.2　方法

研究参加者に対し個別にインタビューを行った。インタビューは許可を得た部分のみ録音し，音声データを書き起こした。この手続きは明治大学商学部「ヒト・動物を対象とした研究等に関する研究倫理委員会」に承認されている。

インタビュー調査の実施期間は，2020年9月10日および9月15日であった。調査対象は，世田谷美術館の小学生への鑑賞教育活動におけるボランティア（鑑賞リーダー）5名であった。

5人のインフォーマントの性別／年齢／職業／居住地／アート鑑賞頻度／鑑賞リーダー経験年数／鑑賞リーダーの生活に占める割合／インタビュー時間を以下に示す。

❏男性/58歳／退職／都内A市／年2-3回/4年/20-30%/23分
❏女性/71歳／専業主婦／区内／年10回/20年/50% /22分
❏男性/84歳／退職／区内／年7-8回/5年/50%超/27分
❏女性/59歳／専業主婦／都外B市／年7-8回/24年/20%/17分
❏女性/73歳／専業主婦／年10回/22年／無回答/39分

インタビューの質問内容は，以下の通りである。

1）過去のアートについての経験・活動

2）過去のボランティア経験

3）活動を始めた理由

4）活動の中で強くこころに残っていること

5）活動による自身への影響・変化

6）鑑賞リーダーの仲間は自身にとってどんな存在か

7）活動を行う地域に対する思い

8）ボランティア活動の対象者に対する思い

9）鑑賞リーダーとは，どのような存在か

5.3　結果

質問1)～3)については，1）美大卒業者が2名，世田谷美術館の生涯教育事業の世田谷美術大学を受講したのは5名全員であった。2）5名中4名が過去のボランティア経験が無かった。3)の回答は「世田谷美術大学受講の影響」「美術館に関わりたかった」「時間を使うため」などであった（重複回答あり）。質問4)～9)についてはKJ法により内容分析を行った。

分析結果の図解を図6に示す。

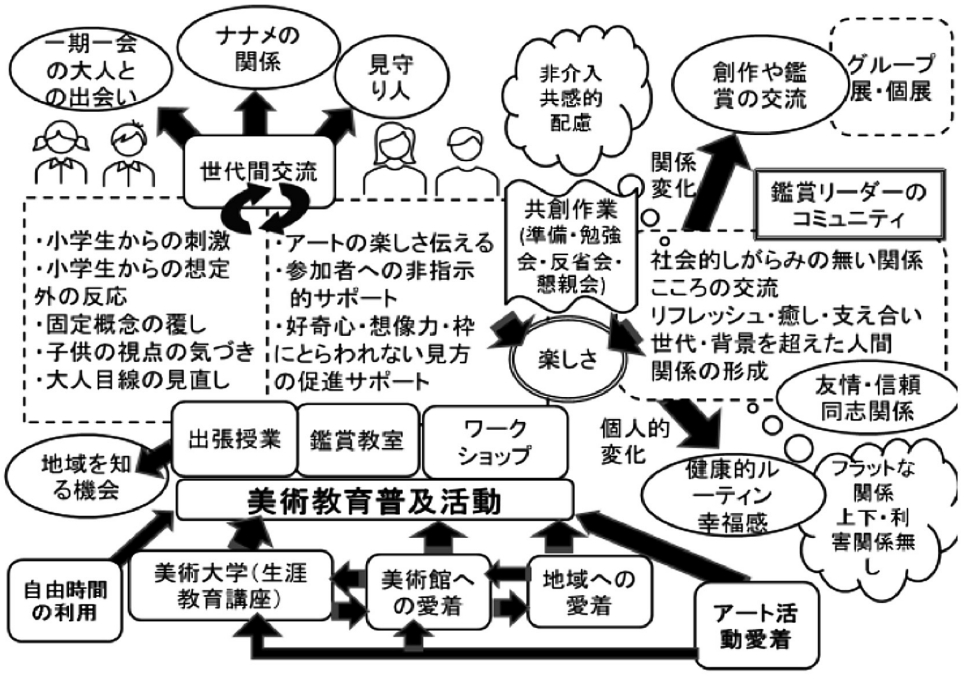

図6　美術館の共創的アート・コミュニティ

5.3.1　愛着行動（図６下部）

アート活動への愛着，地域への愛着，世田谷美術館への愛着や生涯教育講座の受講を通して美術教育普及活動に参加していた。

5.3.2　世代間交流（図６左部・上段）

出張授業では，地域の学校や地域全体を知る機会となり，鑑賞教室では小学生のアートの楽しみ方や好奇心・想像力・枠に囚われない見方の促進をサポートする役割を果たしていた。と同時に，鑑賞リーダー自身も小学生から刺激を受け，想定外の反応から子どもの視点に気づき，大人の固定観念を見直すきっかけを得るなど，ある種の生涯学習の側面が窺える。

小学生側からは，親や教師以外の大人との交流が少ない中，ナナメの関係の大人，見守る大人，一期一会の大人との出会いを得られる世代間交流の場となっていた（図６左斜め上）

5.3.3　鑑賞リーダーのコミュニティ（図６右部）

一方，鑑賞リーダー間の相互作用では，美術教育普及活動の共創作業によって，楽しさや共創の同志感情経験だけでなく，活動を通じて上下関係や職歴学歴に関わらない友人関係や信頼関係が築かれていた。そこでは社会的しがらみも無く，プライベートに介入せずかつ配慮ある快い距離感で，リラックスやリフレッシュにつながり，精神的な支え合いや癒しの場となっていた。そうした場の存在は個人の健康的生活を支えると共に，更なる共創的アート・コミュニティの形成に繋がっていた。

5.4　考察

本研究結果から，美術館ボランティア活動ではアートを通じてフラットな人間関係が築かれていた。これは共創的アート・コミュニティの特徴の可能性がある。

更に美術館ボランティアのコミュニティでは，美術館を拠点にこころの交流や日常の寄り合いの場が形成され，更なるアート・コミュニティを生むケースも見られた。

６．地域芸術祭ボランティアへのインタビュー調査

6.1　目的

本研究の目的は，アートに関するボランティア活動に至る心理学的過程をインタビュー調査により明らかにすることである。先に世田谷美術館の教育普及活動におけるボランティア活動を分析したが（佐々木，2020），本研究では地域芸術祭におけるボランティア活動を研究対象とした。両者を比較検討することにより，伝統的な美術館主義のアートと地域芸術祭の現代アート，それぞれに関わるボランティアの特徴と，両者に共通する心理学的効果を浮き彫りにし，最終的に問題解決の方法を探る。

今回のインタビュー調査は，新潟県十日町市で2000年から行っている大地の芸術祭のボランティアを研究対象とした。大地の芸術祭と世田谷美術館の美術教育普及のボランティアは共に20年以上続い

ており，両者共に美術普及の成功例，芸術祭の成功例として認知されているため選定に至った。歴史の長さとしても世田谷美術館の鑑賞リーダーのボランティアと同等であった。

芸術祭ボランティア活動の内容としては，芸術祭の設営の補助や観客や観光客の案内の業務，バスのガイドなどが主要な活動である。十日町市で行われている大地の芸術祭は，2000年から3年ごとに行われ，ディレクターの北川氏が中心となり実行されている（北川，2014, 2015）。大地の芸術祭の開催年以外にもツアーが開催されており，芸術祭で過去に制作された作品を案内する事業が行われ，開催年以外は，そこでのガイドが主な活動となっている。

また大地の芸術祭のボランティアはこへび隊と名づけられ，十日町市の地域住民だけではなく，全国からボランティアが集まることも特徴的になっている。当初は，地元のボランティアを地サポ，他の地域から参集したボランティアをこへび隊と呼ばれて区別していたが，2020年ごろからどちらも区別なくこへび隊となった。インタビューの時期は，ボランティアの名称の過渡期であり，質問項目に地サポかこへび隊かを質問している。

6.2　方法

研究参加者に対し個別にオンラインインタビューを行った（明治大学商学部「ヒト・動物を対象とした研究等に関する研究倫理委員会」において承認されている）。オンラインはフェイスブックのメッセンジャーのビデオ通話が用いられた。実施期間は，2020年7月16日～24日であった。調査対象は，大地の芸術祭に関わるボランティア7人（男性3人，女性4人，年齢28歳～74歳）であった。7人のインフォーマントの性別／年齢／職業／居住地／ボランティアの種類／インタビュー時間　を以下に示す。

概要は，以下の通りであった。

❏女性/28歳/アルバイト/十日町市/地サポ/3年/21分
❏男性/68歳/退職/十日町市/地サポ/6年/33分
❏女性/30歳/会社員/十日町市/こへび隊/4年/22分
❏女性/74歳/専業主婦/十日町市/地サポ/20年/25分
❏女性/29歳/会社員/東京都/こへび隊/8年/40分
❏男性/56歳/会社員/東京都/こへび隊/1年/35分
❏男性/32歳/公務員/新潟市/こへび隊/5年/39分

6.3　インタビューの質問項目

1）年齢・性別・職業・居住地・居住の理由
2）美術館や現代アート作品を訪問する頻度
3）過去のアートについての経験・活動の有無，内容
4）過去のボランティア経験
5）芸術祭サポーター開始の時期，理由

6）芸術祭サポーターをして良かったこと感動したこと困ったこと辛かったことなど強く心に残っていること

7）芸術祭サポーターの活動による自身への影響・変化

8）芸術祭サポーターの仲間は自身にとってどのような存在か

9）サポーター活動を行う地域に対する思い

10）芸術祭に来る客に対する思い

11）芸術祭サポーターを一言で表現するとどういえるか

6.4　結果

インタビューは許可を得た部分のみ録音し，音声データを書き起こした。書き起こした言語データについて集計と内容分析を行った。質問1）では，居住地域は十日町市内4人，東京都・新潟県が3人であった。出身地は新潟県が6人，東京都が1人であった。質問2）の頻度については，年1, 2回～月3回であった。質問3）については，美術史の教育を受けた1名の他は経験無しであった。質問4）のボランティア経験があるのは7人中2人であった。質問5）については，知り合いや家族から誘われたケースが5，地元の関わりが2であった。質問6）～11）についてはKJ法により内容分析を行った（図7）。

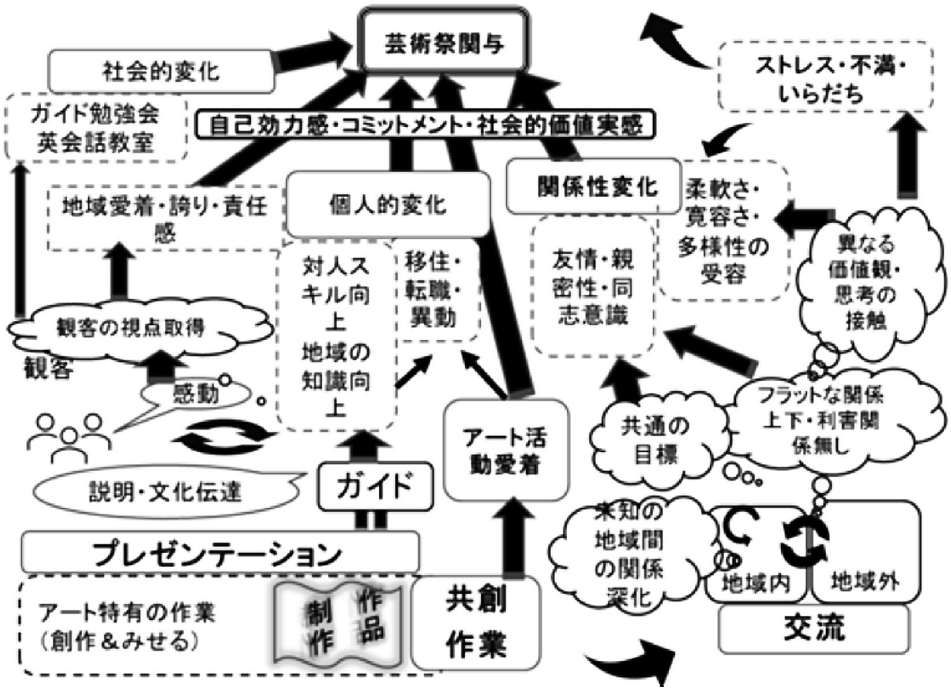

図7　大地の芸術祭ボランティア活動の影響過程

図7の下部に記した作品の共創作業とプレゼンテーションを起点に，アート活動への愛着，地域内

外の交流，ガイド活動等を通して個人的変化・関係性変化・社会的変化が生じ，ボランティア自身に自己効力感，社会的価値の実感，コミットメントの高まり等により芸術祭への関与が強まるプロセスが窺えた。

6.4.1　個人的・社会的変化（図７中央部分～左側部分）

大地の芸術祭の共創アート活動による個人的/社会的変化が，芸術祭への関与を強める過程が見出された。

6.4.1.1　アート活動愛着（図７中央部分）

制作関与によるアート活動愛着，喜びから，十日町市への移住の意思が生まれた可能性がある。

6.4.1.2.　芸術祭のプレゼンテーション（観光客へのガイド活動）（図７左下部分）

観光客に芸術祭を説明する行為から十日町への愛着や移住の意思が生まれた可能性がある。

6.4.1.3　個人的変化（図７中央部分）

個人的変化として，ガイド活動によって対人スキルが向上したこと，地域の知識が向上したこと，観客視点を取得することができ，それによって地域を見直し，改めて地域愛着や誇りを強めたことが挙げられた。

6.4.1.4　社会的変化（図７上部左側部分）

ガイドの勉強会が開催されたり，英語圏の観光客に対応するため，英会話教室が開催されたことが挙げられた。

6.4.2　自己効力感・コミットメント・社会的価値

個人的変化や社会的変化から，自己効力感やコミットメントの高まり，および社会的価値を実感することになった。このことにより，さらに芸術祭への関与度が高まったと考えられる。

6.5 関係性変化（図７の右側上段）

6.5.1　共創作業による関係性変化

1　地域内で未知の地域の人同士の交流

2　地域外の未知の人同志の交流が生じた。

3　1および2の交流はフラットな関係で，上下関係・利害関係が無いと感じられていた。そうした関係から，友情・親密性・同志意識が生じた。

6.5.2　異なる価値観・思考の接触（図６右側下段）

異なる価値観や思考の接触から，柔軟性・寛容性が生じ，多様性を受容できるようになった。

７．美術館ボランティアと芸術祭ボランティアの比較

7.1　共通点

7.1.1　アート活動愛着

美術館ボランティアと芸術祭ボランティアの共通点は，どちらもアート活動愛着があることであった。ただし，美術館ボランティアのアート活動愛着は，美術教育への関与で，芸術祭ボランティアの共通点は，作品制作への関与であった。

7.1.2　フラットな関係性

美術館ボランティアと芸術祭ボランティアのもう一つの共通点は，活動を介してフラットな関係・上下，利害関係無し，世代を超えた関係，友情，同志意識の発生することであった。

特に芸術祭ボランティアの場合は，活動を介して地域の知識向上，活動のための勉強会の開催などが見られた。美術館のボランティアの方は，鑑賞教育の勉強会は，美術館側から一方向的に専門的な情報を得るものである。それを鑑みると，ボランティアのフラットな関係は，共創的なアートの活動から生じると考えられる。

7.1.3　共創的アート活動の特性

美術館ボランティアと芸術祭ボランティアの両方に共通して見られたのは，世代を超えた交流の活性化であった。

このことは，アートは年齢，ヒエラルキー，利害に規定されないからではないかと思われる。また。アートのプレゼンテーション，教育普及は共に地域内の交流を促進し，それぞれボランティアに参加した目的は違っても協働の中での友情・親密性・同志意識が生まれるという共創的アート活動がうかがえた。

7.2　相違点

7.2.1　大地の芸術祭の特異性

芸術祭ボランティアの場合は，地域を超えた交流が見られた。それによってダイナミックな個人的/社会的変化が生じる原因になっていたと考えられる。これは，北川氏の越後妻有アートネックレス構想が起点のパブリック・アートの効果だと思われる（北川，2013，2014）。

北川総合ディレクターの美術で地域，人をつなげる試みは，こへび隊の存在に深く根差していることがうかがえた。

7.2.2　美術館の特異性

一方，美術館ボランティアの活動が創作に結びつくのは美術教育が要因ではないかと思われる。世田谷美術館のボランティアには，美大や芸大の出身者も少なくなく，世田谷美術館が開講する美術講座の「世田谷美術大学」の受講後の人がほとんどであった。また，受講後には同じ年度の元受講生がグループ展を行う活動もみられる。こうしたアート制作自体の創造性は美術教育のたまものだと考えられる。

また，世田谷美術館の場合，美術館ボランティアの活動が，高齢者の生活ルーティンになっているケースがみられた。これは，都市の退職後のコミュニティが欠如しているためかもしれない。また，地方では，草刈りや地域の共同作業というものがありがちだが，都心では逆にそうした共同作業の義務が無いために，離職後に生活の基盤や中心が無くなるのかもしれない。そうした生活の基盤になりうる美術館のボランティアは，高齢者の孤立を防ぐコミュニティとしても機能していると考えられる。

7.5　今後の課題

今後の課題としては，ケースを増やす必要性があるだろう。大地の芸術祭のサポーター，世田谷美術館の鑑賞リーダー以外の地域芸術祭や美術館のボランティアだけでは，それぞれ美術館ボランティアや地域芸術祭のボランティアの特徴を把握することは出来ないだろう。しかし，インタビューを果てしなく多様な芸術祭ボランティアや美術館ボランティアのインフォーマントを増やしていくのは限界がある。また，インタビューでは，どうしてもパーソナリティの影響が色濃く出てしまうことがあり，代表性を保てるものではない。今後は，各地の共創的アート・コミュニティに対して同質の調査を行うため，量的測定が可能な質問紙を作成する必要があるだろう。

引用文献

播磨靖夫（1979）. 共貧共存の思想：生きる思想の表現としてのボランティア論 社団法人　日本青年奉仕協会

葉山登（2018）. 特別支援学級での実践とアート，特別支援教育とアート（高橋陽一編）武蔵野美術大学出版局　101-113.

林容子・湖山 泰成（2006）. 進化するアートコミュニケーション：ヘルスケアの現場に介入するアーティストたち レイライン

北海道立近代美術館（1983）. サマーミュージアム　だまし絵　かくし絵　ふしぎな絵　北海道立近代美術館

池亀直子（2018）. 芸術を通した知的障害児の社会的包摂におけるニーズ及び障壁の検討：特別支援学校教職員アンケート報告から　亜細亜大学課程教育研究紀要, *6*, 25-36.

池川直・美坂康太郎（2017）. 鹿児島県の特別支援学校での美術表現の取り組みの現状と課題: 県美術協会プロジェクト及び高校美術展を通して　鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, *26*, 127-134.

猪飼尚司・高橋美礼・東谷千恵子（2009）世田谷美術館ボランティア・鑑賞リーダー10周年記念誌 1997年−2008年　物語が聞こえる Children find a lot of stories from one picture　平成20年度芸術拠点形成事業（ミュージアムタウン構想の推進）世田谷美術館 pp.18-23.

川井田祥子（2013）. 障害者の芸術表現：共生的なまちづくりにむけて 水曜社

北川フラム（2014）. 美術は地域をひらく　大地の芸術祭10の思想　現代企画室

北川フラム（2015）. ひらく美術 ── 地域と人間のつながりを取り戻す　ちくま新書

北岡明佳（2010）. 錯視入門　朝倉書店

桐澤絵里奈.（2020）. 日本語上級クラスにおけるVisual Thinking Strategiesを取り入れた授業の効果と課題. APU言語研究論叢, *6*, 87-102.

栗田 真司（2013）. 生涯学習としての「博物館における教育普及活動」大学改革と生涯学習：山梨学院生涯学習センター紀要, *17*, 45-73.

森長 俊六.（2018）.「錯視」や「だまし絵」指導におけるデジタル教材の開発 美術教育学：美術科教育学会誌, *39*, 347-359.

森口ゆたか・山口（中上）悦子（2014）. 病院のアート：医療現場の再生と未来 生活書院

増山尚美（2001）. コミュニティアートに関する一考察　北海道浅井学園大学生涯学習システム学部紀要, *1*, 77-91.

西岡梢・君塚仁彦（2019）. 美術館教育におけるファシリテーションの役割と必要性: 世田谷美術館の鑑賞リーダーの実践を中心として 東京学芸大学紀要 総合教育科学系, *70 (1)*, 51-62.

生川善雄（1995）. 精神遅滞児（者）に対する健常者の態度に関する多次元的研究: 態度と接触経験, 性, 知識との関係 特殊教育学研究, *32*, 11-19.

岡庭義行（2012）. 博物館法改正と学芸員養成 帯広大谷短期大学紀要, *49*, 1-10.

李永淑（2014）. “アートな”ボランティア活動 ── 病院本来の目的にはない「楽しさの追求」（森口・山口著（2014）. 病院のアート：医療現場の再生と未来 生活書院 pp.32-46.）

齋藤啓子（2016）. 地域の中の病院とアート活動.（山野雅之（編）医療現場のArt and Health ―国内の実態解明を目指した実践的研究― 2013-2015年度　科学研究費助成事業　基盤研究C（一般）（課題番号25510013）報告書 pp.40-42.）

佐々木美加（2020a）. 美術館ボランティアのコミュニティ形成の心理過程（1）：世田谷美術館実施アンケートの内容分析. 日本コミュニティ心理学会第23回大会発表資料, 46-47.

佐々木美加（2020b）. 地域芸術祭におけるボランティア活動の心理過程：大地の芸術祭サポーターに対するインタビューの内容分析 日本社会心理学会第61回大会発表論文集, 229.

佐々木美加（2021）. 大学における特別支援教育とアート・ワークショップについての一考察 明治大学教養論集, *552*, 129-139.

佐々木美加（2022）. 商学部における障害者についての講義の影響 明治大学教養論集, *561*, 15-24.

杉山貴洋（2011）. だれでもアートワークショップ: 障がいのある子どもがのびのび表現できる場を目指して（〈特集〉障害のある子どもたちをどう支援するか）　地域と子ども学, *4*, 8-21.

鈴木文治（2014）. 障害と芸術：全国初の芸術コースを設置した特別支援学校の取り組み　田園調布学園大学紀要, *8*, 17-48.

高橋陽一・杉山貴洋・葉山登・川本雅子・田中千賀子・有福一昭（2019）. 総合学習とアート 武蔵野美術大学出版局

田中千賀子（2018）. 通常学級における配慮とアート（高橋陽一（2018）. 特別支援教育とアート 武蔵野美術大学出版局　pp.129-141.）

若生眞理子・清水 たま子（2017）. 対話型鑑賞教育（VTS）を応用した対話力の育成法を探る 滋賀短期大学研究紀要, *42*, 127-136.

山野雅之（2014）. ヒーリング・アート ── 制作活動を通じた美術大学の人材育成（森口・山口著（2014）病院のアート：医療現場の再生と未来　生活書院　pp.212-229.）

山野雅之（2016）. 医療現場のArt and Health ―国内の実態解明を目指した実践的研究― 2013-2015年度　科学研究費助成事業　基盤研究C（一般）（課題番号25510013）報告書

追記

本研究の遂行中のアクシデントについて記載しておきたい。本研究は明治大学人文科学研究所・特別研究者として2020年度に1年間の研究期間をいただき，研究を行う予定のものであった。研究では，地域芸術祭・美術館教育普及活動地域の芸術活動が，参加者や担い手の幸福感にどのような心理学的影響を与えるかについて，心理学的に実証研究を行うことを目的としていた。ところが，2020年の4/7～5/25まで都内に緊急事態宣言が発令され，全

国の芸術祭が次々と中止になった。そのため，2020年度は，地域芸術祭がその参加者や担い手にどのような心理学的影響を与えるかを研究することは出来なかった。

その後研究費のうち旅費を2021年に繰り越しが認められたが，2021年も4/25～6/20, 7/12～9/30, 2022年1/9～3/21までまん延防止等重点措置が継続された。この間，中止になった地域芸術祭も多く，予定していた調査対象の芸術祭は県民限定となり，都民である私は芸術祭に足を踏み入れることが出来なくなってしまった。この時ほど東京都民であることを後悔したことはなかったが，どうしようもなく地域芸術祭での芸術祭に参加した際の心理的影響の研究は中止せざるを得なかった。

また，2022年1/9~3/21のまん延防止等重点措置の発令で奄美大島の田中一村美術館への2度目の出張が中止となった。この影響により追加でお願いすることになっていたインタビューが出来なくなってしまった。そのため，田中一村美術館のボランティアの皆様の内容分析については，今回の論文には反映することが出来なかった。

当初予定していた地域芸術祭の心理的影響については，今回の研究を断念したが，一方で，地域芸術祭のボランティアおよび美術館教育普及活動の担い手の心理学的影響については，実施させて頂いたインタビューを中心に研究を行うことが出来た。これはひとえに，地域芸術祭ボランティアの皆様と美術館ボランティアの皆様のご協力のたまものである。コロナ禍にも拘らず，インタビューにご協力をいただいたボランティア・スタッフの皆様に，改めて深く御礼申し上げたい。